

失われた音を求めて

ピアノ修復師シルヴィー・フランソワさんのアトリエにて

取材・文 東ゆか

1840年代から1940年代にかけて、フランスではピアノメーカーが乱立し、その音色と技術を競っていた。ブルジョワ邸宅の音楽サロンが盛況を極め、メーカーも音楽家たちの理想に応える楽器を製作した。1900年代に入ると演奏の場所が広くなり、より大きな音が求められるようになった。こうしてピアノは今と変わらない姿になった。その後、二つの世界大戦によって各国のピアノメーカーは厳しい局面にさらされ、かつてフランスの3大メーカーだったエラル、ブレイエル、ガヴォーは衰退の一途をたどり、閉業を余儀なくされた。そして、現在のバリ、石畳の通りのその奥、一軒のアトリエに古びたピアノが担ぎ込まれる。かつて紳士淑女を魅了し、ピアノストと共に一夜を彩った楽器は、今は色褪せて黙りこくっている。

「ここはクリニク。疲れ果てたおじいちゃんや若者が来て、健康診断をして、悪いところを治してあげます。でもけつして若い人に変身させようとはしません。古くなった楽器は過去の遺産。できるだけ状態を変えないようにしたいのです」アトリエ「ピアノ・バルロン」のシル



子どもの頃は木こりになりたかったシルヴィーさん。15歳のときにピアノ修復師への道へと進んだ

ヴィー・フランソワさんは、この道40年のピアノ修復師。1840年から1940年製のピアノの修復を行っている。「アメリカ人は全く違う考え方をします。中身を全部交換して音がよく出るよ

うにします。でも、私はそうはしたくない。古くなった音を守りたいのです」シルヴィーさんが大切にしたいのは、当時の楽器が宿す不思議な力だ。第2次世界大戦前、ピアノは職人による手作りで、装飾は個性的で美しく、作品と呼ばれるにふさわしい出来栄であった。楽器としても、各メーカーのこだわりが色濃く、例えば平行弦の伝統を死守しようとしたエラルは硬質な音を好んでいたし、柔らかい音を生むフェルトのハンマーを発明したブレイエルは温かな音色にこだわっていた。一方、シルヴィーさんのもとにあったアメリカのポールドウィン社製は、同時代のエラルやブレイエルと比較すると、全く異なる力強さがあり、取材時に聴き比べをさせてもらったところ、フランス2社とのあまりの違いに、驚きの笑みがこぼれてしまったほどだった。

「1900年代に入ると各メーカーが同一の技術でピアノを作るようになりましたが、求める音には違いがありました。同じ技術で作っていても、最後には何か魔法がかかったのです。それがこの時代のピアノの素晴らしいところなんです」

修復師の仕事はそれぞれのピアノの特徴や、本来の音を守ることだと語る。例えば修復を手がけた1905年製のブレイエルは音も出ず、ボロボロの状態で作って来た。弦はバランスを計算しながら張り替え、ピン板も交換。ハンマーはブレイエルの特徴を損なわないように厳

選した。

「ハンマーは専門の工場にお願いしています。いろいろと注文をつけることがあるんですけど、いつもですよーメーカーの個性に合った修復ができるようにリクエストします。修復師の中には自分のエゴというか、何か自分らしさを加えようとする人や、中身を全部取り替えてピカピカにするだけの人もいます。しかし私は、製作者が作りたかったように直したいのです。そのためにまず、どのようなピアノを作ったのかをよく理解するようにしています」

要なのは、知性や技術だけでなく、40年間で育まれた感覚、も欠かせない。「ピアノ製作の歴史を学んだのはもちろん、若い頃から、古いエラルやブレイエルで演奏されたレコードを聴き込みました。だからまったく音が出なくてもそのピアノの能力や音楽的な可能性を感じる。ことができません。そういった感覚的なものは必要不可欠で、修復の方向性を示してくれるものなんです」ただし、実際にピアノがどんな音を出してくれるかは最後までわからない。1台のピアノに1000時間の修復時間をかけたとしても、音色を調整できるのは

最後の50時間だけだという。さらなる最終調整はピアノストと共に行われる。

「最終的に、修復師とピアノストと音楽が細い一本の糸でうまくつながっていないといけません。高いレベルでつながるには質の高い修復が施されていないといけないのです」

シルヴィーさんの手でよみがえったピアノは、コンサートやレコーディングで使用されたり、海を渡って日本にも届けられている。シルヴィーさんはピアノ修復師として唯一M・O・F（日本でいう人間国宝）に認定され、レジオンドヌール勲章を受賞している。しかし、彼女は「自分は何者でもない」と語る。

「私がこのピアノを作ったわけではありません。ピアノを作った職人がいい仕事をしたら良い音がするのです。私の存在は、一台のピアノの長い歴史のほんの一部分にすぎません。しかし、ここで心を入れた仕事をしなければ、全く個性のないピアノになってしまうのです」美しくチャーミングなピアノを次世代へ継承することが彼女の願いだ。

「古いピアノを修理すると『美しいピアノが戻ってきた』と感動してもらえます。私の仕事はそんなふうに心に訴えかけるような仕事なのです。修復した楽器を使った演奏会や、レコーディングの申し出もいただきます。そんなとき、古いものを次の世代に伝えるという私の使命が果たされたと感じるのです」失われた音を求める仕事は続く。

「私の仕事は、本来の音を守ること。ここへ来たときの古くなった音を守りたいのです」



力仕事から細かな作業まで修復の工程は幅広い。可能な限り、ピアノが作られた当時の技術と材料を用いて修復している



ピアノ・バルロン PIANOS BALLRON
14/16, rue Jean Bologne 75016 Paris
+33 (0)1 46 47 93 12 / +33 (0)6 15 10 12 99
balleron@pianos.fr ※アトリエ見学は要予約
<https://www.pianos.fr/>



(左) 世界中のコンサートホールやスタジオで演奏されるシルヴィーさんの修復楽器。(中央) MOFであるシルヴィーさんは後進の育成にもあたっている。(右) 細かな木工作業も要する修復作業。アトリエには木工作業用の機械も置かれていた。



歴史的なピリオド楽器 修復家・製作家に聞く

取材・文/武田奈菜子

クリストファー・クラーク
Christopher Clarke



「ピアノ製作・修復の道を選んだきっかけは？」

エディンバラ大学で心理学を学んでいた頃、趣味で古いハルモニウムを直し始めたのが最初です。その後1820年頃のスクエア・ピアノを購入し、ラッセル・コレクシオンの修復家に助言を求めました。卒業後はサンダーランド博物館でクレメンティのスクエア・ピアノを修復し、それを契機にフリッツ・ティッセン財団から助成を得て、ニールンベルクで学ぶ機会を得ました。そこで進むべき道が定まったのです。

「どのような訓練を受けましたか？」
木工はほぼ独学でした。フェランティ社で精密金属加工の見習いをし、夜学で宝飾や銀細工を学びました。1974年からアドラム・バーネット工房に入り、歴史的楽器の修復を任せられました。そこは仲間と共に学び合う「古楽器製作者アカデミー」のような高水準な環境でした。

「録音技術が存在しなかった時代の、幻の音」を再現する際の苦労は？」
古い楽器に込められた技術や素材が最大の苦労です。それらを当時の文脈で理解することができず、その時代の響きになり近づくことができません。ただし、度重なる不適切な修理が本来の姿を損なったケースも多く、手付かずで残っている希少な楽器に出会えるのは祝福のようなものです。

「モーツァルトやショパンの時代の道具を自ら再現して使っているそうですね？」
手道具を使うことで、素材は無理なく、あたかも道具に導かれるようにして仕上がっていくのです。手鉋が木の表面を削るときはサツという音を聞けば、難しい木目であっても、その刃の切れ味や調整具合までわかります。そして手鉋が残す仕上げの鮮明さは、鉋削り機や研削材による仕上げ

とはまったく違うのです。私の道具のほとんどは、ヨーロッパ製の非常に高品質なものです。友人から贈られた愛用の日本の鉋や、自分自身で作った特製の道具もあります。

「特に思い深い楽器はありますか？」

ルッカースの1624年製チェンバロや、1780年頃のジルバーマンのフォルテピアノ、そしてエラルの1802年製グランドピアノの複製など、それぞれに特別な思い出があります。

「修復家として最も充実を感じる瞬間は？」

修復を終えた楽器を、古楽器に精通した演奏家が弾き、その音が作曲家の新たな側面を明らかにするときです。自分の仕事にそれにつながったと感じる瞬間が何よりも喜びです。



ルッカースの1624年製チェンバロを修復中のクラーク氏

ロバート・A・ブラウン
Robert A. Brown



「ピアノ修復という道を選んだきっかけは？」

16歳のとき、1659年製のシュテールヴァーゲン・オルガンの音に衝撃を受け、楽器の音色の質こそ音楽を伝える上で不可欠だと実感しました。その後、これはオルガンやバロック音楽だけでなく、あらゆる音楽に当てはまると理解しました。最終的に18世紀後半から19世紀初頭のウィーン式ピアノの製作・修復に携わることになったのは偶然も大きいですが、子どものころからウィーン古典派の音楽が好きだったことも影響しています。

「どのような訓練や徒弟修業をしましたか？」

ニュージーランドのオークランド大学でオルガンを学んだ後、ブリュッセルのバトリック・コロンの工房でオルガン製作の修業をしました。その後フランスで1年半チェンバロ製作を経験し、サンス近郊のクリストファー・クラークの工房でフォルテピアノの修復に携わりました。

と後継者のセルゲイ・クラマーが製作した最新のブレイエルは、マドリッド、ウィーン、プラハなどの主要ホールでオーケストラと共演し、ショパン本来の声を届けています。

「仕事で最も満たされる瞬間は？」

偉大な音楽家たち、たとえばアンジェラ・ヒューイット、レイフ・オウエ・アンネス、アンドラーシュ・シフ等が楽器に命を吹き込む瞬間です。聴衆から「聴きたかった曲が、もとはこんなに美しく響いた」という声を聞くと本当にうれしく思います。

「現在のプロジェクトや今後の希望は？」

修復と新作の両方に注力しています。夢は、モーツァルトをモーツァルトのピアノで、シューベルトをシューベルトのピアノで、ショパンをブレイエルで演奏するコンサート。を日本で行うことです。



「Chopin's Warsaw piano」の作業中のマクナルティ氏

「幻の音」を再現する際、どのような手掛かりに頼り、また、その過程で直面する課題は？」



ワークショップで指導をするブラウン氏

新しい楽器を作る場合も、古い楽器を修復する場合も、最終的には自分の音楽的感性と理解に頼ることになります。可能な限りオリジナルに忠実に複製することや、オリジナルの状態に戻すことを心がけています。演奏家との話し合いは大いに役立ちますが、最終決定は私一人で行います。常に自分のしていることを問い直すことが進歩への道だと思っています。

「手がけた楽器の中で、特に思い深いものは？」

私が複製を製作する際の手本となった楽器、たとえば、アイゼンシュタット州立博物館のワルター・ピアノや、ウィーン国立音楽大学所蔵のローゼンベルガー・ピアノ、ベルリンのベヒシュタイン財団所蔵のシュトライヤー、ミンスブルック州立博物館のグラッフのピアノなどです。

「最も充実感を得る瞬間は？」

自分が修復、製作した楽器が演奏され、その音を通してそれまで理解していなかった音楽や、理解していると思っていた音楽

ポール・マクナルティ
Paul McNulty



©Majka Votavova

「ピアノ製作に進んだきっかけは？」

1978年にスターズ・ターケルの本「仕事」を読んだとき、紹介されていた200の職業の中で、本当に幸せそうだったのはピアノ調律師だけでした。それは私にとって大きな啓示で、翌朝、早速ピアノ技術学校に入学しました。チェンバロ復興運動にも影響を受けました。演奏可能な古いモデルをもとに新しく楽器を作ること、ラモーやクーブラン、バッハ、フレスコバルディの音楽が、当時の栄華を伝える響きで再びよみがえるのを聴いて、私もそういう楽器を作りたいと思ったのです。

「どのような訓練を受けましたか？」

ボストンのノース・ベネット・ストリート・スクールでビル・ガリックに学びました。多くの学生はスタインウェイで働くことを目指していましたが、私は古いピアノに惹かれました。ショパンやモーツァルトの音楽を、作曲家自身が知っていたそのまゝの音で再現したかったのです。

「ショパン研究所との取り組みについて教えてください。」

ショパン研究所と私は共通の情熱を持っており、それはショパン本来の声をよみがえらせることです。ショパンの音楽は、作曲当時は今とは違った響きを持っていました。フェスティバルやピリオド楽器コンクールを通じて、本物の響きを取り戻そうとしています。そのために古いピアノの収集や修復、さらには新作の「ショパン時代のピアノ」の委託製作も行いました。

「フッフホルツによる『Chopin's Warsaw piano』の特徴は？」

これはショパンが青年期に使ったピアノで、「ピアノ協奏曲第2番」もこの楽器で作曲されました。温かく詩的な響きで、彼の初期作品の演奏に最適です。現存していないため、保存されている別の楽器で再現しました。実際にこのピアノで演奏すると、彼の初期作品はまさにこの音のために書かれたことがわかります。

「ショパンのブレイエルの初の複製を製作されました。どのような楽器ですか？」

ショパン自身が「最高の中の最高」と称したブレイエルは、アタック感がなく、その響きは当時「水晶と水の結婚」と形容されました。演奏者の指に全く異なる感触を与え、新しい表現の可能性を広げます。私

100年前のベビシユタインピアノ

約100年前、山形市の山形市立第一小学校には、ベルリンからやってきた1台のベビシユタインピアノがありました。たくさんの人に愛用されたのち、弾くことが難しくなったピアノは、山形市が地元楽器店の富岡本店さんに依頼し、再生されることになりました。再生までの経緯とピアノのこれからについてお話を伺いました。

ピアノを再生するに至った経緯

熊坂 このピアノは、山形市立第一小学校の旧校舎が建てられた記念に、1929年に同窓会により贈られたものです。ピアノの製造年は1927年で、旧校舎竣工と同年代です。旧校舎は現在、国登録有形文化財に登録され、山形市における創造都市の拠点としてリノベーションを行って、「やまがたクリエイティブシティセンターQ1」という施設として活用しています。それに合わせて、このピアノも創造都市のシンボルとなるよう、再び使えるように修繕しました。それまでは、Q1の前身である「山形まなび館」の3階の一室に保管されていました。

富岡 当時まなび館のスタッフに弊社音楽教室の生徒の保護者の方がいらしていました。リノベーションのタイミングで部屋などを掃除しなければならなくなり、その保護者から「とても古くてボロボロのピアノがあるんだけどどうしたらいいか」という相談がありました。劣化による破損も激しく、処分の話も出ていた

お話し/熊坂望さん
(山形市文化創造都市課)

お話し/富岡宏一郎さん
(株式会社 富岡本店)

のですが、捨てるにしてもまずこのピアノについて調べる必要があります。ベビシユタインさんに問い合わせたところ、かなり古いピアノということになりました。捨てる選択もできるけれど、せっかく校舎と生まれ年度も一緒だし、施設もリニューアルするのであれば、歴史を語るシンボルとしてピアノも再生できないかということも話が進んでいきました。

熊坂 富岡さんに修理をお願いするまでは、役所内での内部調整などで大変な面もありましたが、最終的には、市長が当時の議会で、ピアノを演奏可能な状態に修繕し活用することを表明しました。経費は、企業版ふるさと納税で寄附を募り、ご協力いただいた企業様のおかげで、修繕にかかった経費の多くは賄うことができました。

富岡 当時の文化振興課長が理解ある方で、「ぜひやりたい」と言ってくださっていたようです。

修理後、ピアノが戻ってきて

富岡 鍵盤も割がれ、かなりボロボロな状態で

したが、ベビシユタインさんの八王子の工房に運び、弾ける状態まで直していただきました。当時の仕様であった、トロピカル仕様を残しつつ、塗装も綺麗にしたいと、ピアノの命の部分である響板やフレームはそのままにしている。新品の音ではなく、どこか100年前のものを感ぜられるような、独特な音がします。鍵盤も元のように全て象牙で張り替えていただきました。その中でも当時のものを残すために、低音3つの鍵盤は張り替えずそのまま残しました。当時のものをそのまま触っていただきたいという思いがあります。

再生したピアノの地元での活用

熊坂 令和6年度までのデータでは、公式に30回使われています。山形市主催の「やまがた秋の芸術祭」で富岡本店さんにもご協力いただき、このピアノを弾いてもらうイベントや、Q1



当時の資料より、山形市立第一小学校体育館に置かれていたピアノ



劣化による破損が激しく、使用不能の状態のまま保管されていた



再生後のピアノ。これからさまざまな形で活用されていくのが楽しみだ

の管理運営を行なっている株式会社Q1でも、主催事業としてコンサートを行なっています。当初は市や株式会社Q1が使うことが多かったのですが、最近では市民の皆さんに使っていただく機会も増えました。例えば、個人の練習、地元大学ピアノサークルの新人歓迎イベント、結婚式など。ピアノの知名度が広がってきたこともあり、使っていたたける機会が間違いなく増えてきていると実感しております。今年の芸術祭では、初の試みとしてピアノを前庭に設置してジャズフェスティバルを開催し、ジェイコブ・コーラーさんに弾いていただく予定です。

今後のピアノの役割

熊坂 このピアノを山形市の「創造都市のシンボル」として活用するべく、このピアノをきっかけに山形市のさまざまな文化が発展し、街が賑やかになっていくことを目指しています。現在このピアノの貸し出しは、今後を見据えた試験的なもので、本運用に向けて、貸し出しの方法等を検討しています。

シーボルトのピアノ

文/小野哲

写真提供/小野ピアノ工房調律センター
プロフィール
1955年：栃木県真岡市出身/1977年：河合楽器ピアノ調律技術者養成所を卒業し同社に入社/1983年：河合楽器退職/1983年：小野ピアノ工房調律センター設立。製造、修理技術を国内、ヨーロッパ等の工場、修理工房で研鑽を積み/1996年～日本の歴史的ピアノの修復活動を行い多数のピアノを手掛ける。全国各地の主要ホールでコンサート調律も行い、一般家庭やピアノ講師の調律も行っている。

「シーボルトのピアノ」の発見と修復計画の立ち上げ

2000年10月（一社）日本ピアノ調律師協会の、熊谷美術館学芸員宮本方喜人氏の協力により「シーボルトのピアノ」修復計画を立ち上げた。当時の会長宇都宮謙三氏によってプロジェクトチームをつくり調査に入った。ドイツ人医師シーボルトは1823年長崎出島のオランダ商館の医官として来日した。江戸時代、鎖国政策により外国人の入国が厳しかった状況のなかオランダ人と偽って入国したらしい。西洋学問を伝えるなどその功績は計り知れない。心から日本を愛し日本人女性との間に愛娘「イネ」をもったイネは後に日本初の産婦人科女医と

なった。

シーボルトは遠い異国の地で自らを慰める目的でピアノを持ち込んだとされている。長崎の住居でピアノを奏でて大勢の人に聴かせていたと書簡に記されている。

このピアノは1955年、偶然にも私が生まれた年に発見された。山口県萩市の熊谷家土蔵の中から発見されピアノ内部にシーボルトのサインがあり、それが決め手となってシーボルトから熊谷への贈り物であることが判明した。熊谷家4代目当主 熊谷五右衛門義比は膝や足の治療を受けるため長崎に赴き、そこでシーボルトの診療を受けたことで、二人の交流があり、友好の証として贈られた物らしい。

「当時の音を奏で、子どもたちに聴かせたい」修復秘話

このピアノはスクエアピアノで、ウィリアム・アンド・サンズ社でイギリス製「E68」1819年製造（推定）であり、127年間、熊谷家の土蔵の中の長持の中で保管されていた。当時のピアノ調律師協会の役員数名などで鑑定が行われ、1958年広島市にあったピアノ製造工場において修理が施され



シーボルトのピアノ修復中の様子



シーボルトのピアノ

たが、フォルテピアノ等の古楽器の修理ノウハウが無いためか完全な修復には至らなかったようである。その後修復の話はいくつかあったようだが、熊谷美術館では展示するだけになっていった。会長の宇都宮氏の思いは「日本ピアノ調律師協会で修復し当時の音を奏でられたいか、子どもたちに聴かせたい」との願いであり、私も同行し山口県萩市に足を運んだ。宇都宮氏は「修復は小野が担当します。ぜひ調律師協会で修復させてほしい」と目を十代目熊谷五右衛門幸三館長に申し入れ、受諾いただいた。

2009年栃木県真岡市の小野ピアノ工房調律センターに搬入し修復が始まった。

た。響板や駒の割れ、チューニングギンクの折れ、ハンマーヒンジスキンの劣化など、状態は悪く、弾けない鍵盤がほとんどであった。イギリスから当時と同じ部品（軟鉄の弦、皮、木材等）を取り寄せ6カ月の修理期間を経て当時の音がよみがえった。その後「楽器フェア」に出展、演奏を披露し多くの来場者に2000年前の柔らかな繊細な音色に耳を傾けていただいた。

山口県萩市の熊谷美術館に戻ったシーボルトのピアノは毎年1〜2回程度コンサートを開催し、一般の方々に楽しんでもらっている。